
落ちていく闇の中で、

はなちょこ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

落ちていく闇の中で、

【Zマーク】

N1736M

【作者名】

はなぢょ

【あらすじ】

明菜が死を覚悟した瞬間。
世界が変わった・・・。

私の目に飛び込んできたのは。
下を歩いている人々。

車道を途切れるごとなく走っていく車。

鼠色のアスファルト。

最初はミニチュアのように見えた風景は
徐々にいつも見る風景と同じ大きさになつていく。
唯一、違うのは。
いつもの風景が逆さまに見えることだった。

ああ、私、死ぬんだ・・・・・。
どうせなら最後に・・・・・。

悔しいな。

すごく悔しい。

そのまま私は目を閉じた。

目を覚ますと見慣れた天井が見えた。

ピリリリリリリリ。

耳障りな電子音が辺りに響く。

私は無意識に携帯に手を伸ばして、アラームの機能を解除した。
体を起こして、ため息をついた。

嫌な夢を見た。

半分くらい忘れてしまったけど。

ビルの屋上から落ちる夢だった。

ああ、本当にリアルで怖かった。

夢で良かつた。

「明菜ー。起きなさい。遅刻するわよ」

ドアの向こうから母の声が聞こえた。

「はーー」

私はそう返事をすると素早く制服に着替えてダイニングへ行つた。
ダイニングのテーブルには朝食が並んでいた。

父は新聞を読みながらトーストを食べている。

私も席についてスクランブルエッグをフォークですくつた。

ふと、テレビに目をやる。

「バスが山道で事故を起こすなんて怖いわねえ」

母がそう言つた後

「運転手は運転前に酒を飲んでいたらしいな」

父がそう言つてテレビをチラリと見た。

「一ヶ月くらい前にも似たような事故あつたよね」

私は牛乳を飲みながらそう言つた。

「・・・・・そんなことあつたかしら」

母が父の空になつた口づきに牛乳を注ぎながら言つた。

番組が芸能ニュースに切り替わつた。

私はテレビの画面にデカデカと映し出された文字を見て驚いた。

「へえ。この女優さん結婚したのね」

母がテレビを見ながらそう言つた。

私は父に「ちょっと新聞見せて!」と言つて、新聞を見る。

心臓の鼓動が速くなつた。

もう一度、よくよく見てみる。

見間違ひではない。

「・・・・・今日つて六月一日?」

震える声でそう聞くと父が言つた。

「ああ。そうだよ」

父はそう答えると朝食を食べ終えて席を立つた。

「明菜もボーッとしてないで早くこ飯食べちゃになさー」
そんな母の言葉は私の耳には届かなかつた。

六月一日。

父が嘘をつくはずなどない。

新聞にだつてそう書いてあつた。

ニコースだつて・・・・・。

「ぐんと唾を飲み込んだ。

考えたくないけど。

信じたくはないけど。

どうやら私は。

一ヶ月前に戻つてしまつたようだ。

なんで?

どうやつて?

どうして?

色々な疑問が頭に浮かんだけど。

そうとしか考えられない。

じゃあ。

なんで私は一ヶ月前に戻つてきたんだり。

学校へ向かう道を歩きながら考える。
少し遠くに田をやるとビルが見えた。
そうだ。

ビル。

「明菜、おはよう

その声にハツと我に返つた。

田の前には親友の真美が立つていた。

「あ、おはよう

「ねえ。何だか顔色、悪いよ」

真美はそう言つて私の顔を覗き込んだ。

「ううん。別に何でもないよ」

私はそう言って慌てて笑顔を作つた。

一ヶ月前に戻ってきた。

そんなことを言つても誰も信じてはくれないだろう。

真美とお喋りをしながら学校への道を歩く。

「昨日、彼氏と別れたんだ」

知つてる。

そう言いそうになつたのを慌てて堪えて

「え？！ どうして？」

そう驚いたフリをして聞いてみた。

真美は遠くを見ながらポツリと呟いた。

「・・・・・好きな人がいるんだ」

私は一ヶ月前と同じように「誰？」とは聞けなかつた。

昨夜、見た夢。

あれも夢ではない。

さつき、ふとビルを見たら思い出した。

私は確かにビルから落ちたんだ。
地面に落ちていくとき。

私は気を失つて、気がついたら自分の部屋にいた。
そして一ヶ月前に戻つていた。

でも。

なぜビルの屋上にいたのか。

なせ私は屋上から落ちてしまつたのか。
それが思い出せない。
もし。

そのまま同じように過ごしてしまった。ひ。

一ヶ月後。

また私はあのビルから落ちてしまつのではないだろうか。

それとも。

今この状態が夢なのか。

ああ。

何だか訳が分からなくなってきた。

「おはよう。鈴木」

窓の外を眺めてぼんやりしていると。

後ろで元気な声が聞こえた。

無視していると。

視界にそいつの顔が入った。

「なによ」

「無視するのは良くないよー」

高橋がそう言つてニッとした。

高橋は一年生の時に同じクラスになつて
文化祭がキツカケで話すようになった。

一年生も同じクラスになつたので

こうしてよく高橋から話しかけてくる。

クラスで目立つほうでもなく地味な雰囲気でもなく
ごく普通の男子だ。

「何か元気ないね」

高橋の言葉に真美が言つ。

「でしょ？ さつきからずっとそつな」

その横顔がとても嬉しそうに見えた。

とても昨日、彼氏と別れたとは思えない。

私はそんな真美から視線を外して

また窓の外に目をやつた。

「ねえ。カラオケ行こうよ！」

真美がそう言って笑う。

「ストレス発散したいしさ」

私は何も言わずに真美についていく。
しばらく歩くと真美が足を止めた。

「ここの一階にあるカラオケ安いんだ。元彼とよく来たよ」
私は目の前に建っているビルを見上げた。

次の瞬間。

なぜか私はビルの屋上に立っていた。
そして。

私の肩を誰かが勢いよく押した。

「鈴木！」

その声にハツと目を覚ました。

クラス全員が私に注目している。

どうやら居眠りをしてまつたらしい。

「一番前の席で居眠りするとはいいで胸だ。罰として次の問題解け

先生はそう言うと丸めた教科書で軽く私の頭を叩いた。

額から嫌な汗が出た。

さつきのは夢なんかじゃない・・・・・・。

一ヶ月後。

私がビルから落ちたあの日の記憶だ。
そうだ。

確かあの日は。

あのビルに真美とカラオケに行つて・・・・・・。

それからが思い出せない。

でもハツキリとしたことがある。

私はあのビルの屋上から誰かに突き落とされたんだ。
事故なんかじゃない。

じゃあ、誰が？

もしかして・・・・・・。

真美が私を・・・・・・？

つうん。

そんなはずない。

親友だもん。

真美はそんなことしない。

結局。

何も分からぬまま数日が過ぎた。
あれから。

あの日の、私がビルから落ちた日の記憶は
真美と一緒にカラオケに行つたことと、誰かに突き落とされた、
といふこと。

まだその一つしか思い出せなくて。

相変わらず、一度目の六月を過ぎて行つた。

「お。鈴木。お昼、焼きそばパンかー！」

お昼休み。

真美とお昼はんを食べていると高橋がやつてきて、やつ言つた。
「なによ。高橋」

私が焼きそばパンを食べながらそう答える。

「何だか最近の鈴木、冷たいなあ」

高橋はそう言つと友達の所に戻つて行つた。

「本当。最近、明菜つて高橋君に冷たいよ」

真美はそう言つと机の上に置いた携帯に手をやつた。
その瞬間、彼女の表情が変わる。

「どうしたの？」

私がそう言つと真美は首を横に振つて言つた。

「何でもない」

なんでだろ？

私はなんで高橋にこんなに冷たくしてしまつんだろう。
自分でもよく分からない。

何かあつたんだつけ。

・・・・・何か。

「好きだ」

目の前にいる男子が顔を真つ赤にしてそう言つた。

「え？」

私は驚いて聞き返す。

「だから！ 鈴木のこと一年の時から好きだつたんだよ」
それだけ言つと、その男子は校舎の方へと走つて行つた。
私はそんな高橋の小さくなつた後姿を眺めながら呟いた。
「そんなこと、突然、言われても・・・・・」

目を覚ますとそこは見慣れた部屋だつた。
テレビがつけっぱなしで賑やかな笑い声が静かな部屋に響いてい
る。

膝の上には本が開いたまま乗つてゐる。
どうやらリビングのソファに座りながら本を読んでいて、居眠り
をしてしまつたらしい。

さつきのは。

高橋から告白されたのは。

夢じやない。

思い出した。

あの事件が起きる3日前に私は高橋から告白されていた。

だから自然と冷たくしてしまったのだ。

私は高橋の気持ちには答えられない。

だって真美の好きな人は・・・・・。

そこまで考えてハツとした。

やっぱり私を突き落としたのは真美かもしれない。

真美が彼氏と別れたのも高橋のことが忘れないからで。

それで、あの日・・・・・。

そう考えると辻褄が合ひ。

私はやっぱり真美に突き落とされたのだろうか。

だけゞ。

やっぱり真美が私を突き落としたなんて思えない。

きっと、何かあるはず。

まだ思い出せない大事な記憶が。

それから。

また変わらない毎日を過ぐした。

私が一ヶ月前に経験している日々だとこうひとと、これから起る、あの事件さえなければ、『ぐく平凡で幸せな日々だった。

だから。

私がビルから突き落とされるなんて。夢なんじやないかとさえ思えてきた。

そして。

とうとう、事件の前日となつた。

お昼休み。

手に持つたサンドイッチに視線を落としながら、真美が大きな溜め息をついた。

「どうしたの？」

そう聞くと、真美が口を開いた。

「最近さあ、誰かに後をつけられてるみたいなの「え？」

驚いた私に、真美が慌てて付け足した。

「あ、でも、私の勘違いかもしれないんだけどね」「…………そつか…………」

「あーあ。カラオケ行きたいなあ。でも今日は部活あるしな〜」
真美はそう言つてサンドイッチにかぶりついた。

背中に悪寒が走る。
体が震えた。

・・・・・夢なんかんじやない。
明日、起きることは夢じやない。

やつと想い出した。

誰が私を突き落としたのか。

私の肩を思い切り強く押した。
その手を。

ハッキリと想い出した。

「ごめん。ちょっと私

それだけ言うと私は席を立つた。

友達とお昼ご飯を食べていた高橋を廊下に呼び出した。

「なんだ？ 告白の返事か？」

高橋の言葉に私は言った。

「ううん。ごめん、そのことじやないの」「…………いや別に冗談だからいいけど」

高橋はそう言つとポリポリと頭を搔きながら下を向いた。

「高橋つて体操部だつたよね？」

「ああ。そうだけど」

「どうしても頼みたいことがあるんだ」

私の言葉に高橋が真剣な顔つきになつた。

次の日。

朝起きると窓を開けた。

快晴だ。

雲ひとつない青空。

鳥の声を聞きながら
すう、と息を吐いた。

大丈夫。

上手くいく。

心の中でそういう自分に言い聞かせて
いつもより早めに家を出た。

メールが届いたことを知らせるメロディーが携帯から鳴った。
高橋からだ。

「貸してもらえたよ。予定通り準備できそうだ」
そのメールの内容を見てホッと安心した。

今日、学校を休むこともできた。

でも。

どうしても私を突き落とした犯人を捕まえたいのだ。
それに私が今日、ずっと家にいたとしたら。
きっと私ではなく・・・。

今日一日は、いつも以上に授業に身が入らなかつた。
五分置きに時計を見ては早く時間が過ぎないかとイライラしてい
た。
こんなに一日が長く感じたのは生まれて初めてだ。

放課後。

真美が言った。

「今日は部活がないんだ。カラオケ行こう」

「うん」

そう返事をした私の心臓の鼓動が速くなつていぐ。

真美とお喋りをしながらカラオケまでの道を歩く。
あのビルが近づくにつれて

今すぐここから逃げたい、という衝動にかられたが
それを必死で抑えた。

チラリと後ろを見ると、やはり誰かの気配があった。
・・・・・やつぱり。

私は拳を握った。

今すぐにでも殴つてやりたい気分だった。
が、それでは計画が台無しだ。

あのビルの前で真美が足を止める。

私はビルを見上げた。

五階建てのビル。

その屋上から私はあいつに突き落とされた。
いや、これから突き落とされるんだ。
そう思うと体が震えた。

「先に歌つていいよ」

カラオケの個室に入ると私は真美にそう言った。

「そう？　じゃあ先に入れるね」

真美は機械を慣れた手つきで操作した。
私は携帯で時計を確認した。

そろそろだ。

ガチャ。

ドアが開く音がしたと思うと。
部屋の中に入ってきた。

真美が驚いた顔で男を見て言つ。

「・・・・・昌弘」

真美の元彼だ。

一ヶ月前に別れを切り出したというあの元彼。

「真美。話がある」

昌弘はそう言うと真美の細い腕を掴んだ。

真美は抵抗した。

私は必死で真美を助けようとしたけど男の力には敵わない。

昌弘は真美を無理やりエレベーターに乗せた。

私もそれについていく。

エレベーターを降りて屋上に続く階段を上っている最中。

私は昌弘にバレないように高橋にメールをした。

「こんな所に連れてきて、何なのよ」

真美が昌弘を見ないようにして、そう言つた。

「俺とヨリを戻してほしいんだ」

「だから私には好きな人がいるって言つてるでしょー」

真美はそう言ってからハツとして、こう聞いた。

「まさか・・・・・私の後をつけてたのつて・・・・・・

「そうだよ」

昌弘はそう言つて一ヶコリ笑つた。

「携帯に知らないアドレスで変なメールが来るのも・・・・・・

真美の言葉に昌弘は意味深な笑顔を見せた。

「最低！ねえ、真美、今からでも警察に連絡しよう！」

私がそう言つと昌弘は今度は私の腕を掴んだ。

そして思い切り突き飛ばした。

私の体は飛ばされ、その反動で尻餅をついた。

真後ろは、ちょうどビフォンスが途切れていって

次に押されれば私は下に落ちてしまう。

一度目の今だから分かっていることだ。

私は昌弘を睨んで立ち上がった。

「睨むんじゃねえ！」

次の瞬間。

ドン。

昌弘が力一杯私の肩を押した。

そして。

私の体は一瞬だけ宙に浮かんだ。

そのまま。

真っ逆さまに下に落ちていく。

「鈴木ー！」

下で高橋の声がした。

ドサッ。

落ちた場所はやわらかいモノの上だった。

高橋に頼んで学校にある、やわらかいマットとそれを持ち上げてもらつたための体操部員を用意してもらつたのだ。

「大丈夫か？！」

高橋の言葉に私は頷いた。

遠くでパトカーのサイレンの音が聞こえた。

「明菜！ 大丈夫？！」

そう言つて真美が駆け寄ってきた。

「・・・・・ 平気」

私はそう言つて俯いた。

さつきの光景は。

見間違いだつたんだろうか。

私が下に落ちる瞬間。

真美がニヤリと笑つたのは。

(おわり)

(後書き)

「」で読んでくれた方ありがとうございました。

これも数年前に書いた話です。

恋愛抜きで書いたのはかなり久々でした。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1736m/>

落ちていく闇の中で、

2010年10月8日11時25分発行